

調理済み・半調理済み食品の利用状況とイメージ —新潟と東京の比較—

新潟大教育 ○高橋 洋子、奈良女大生活環境 勝田 啓子

目的：平成2年6月、調理済み・半調理済み食品の利用状況とイメージを尋ねるアンケート調査を大阪・広島・山口・新潟で行ったところ、新潟は全般にマイナスイメージが多いなど、他の3地域と異なる傾向が認められた。その要因を探るため、今度は新潟と同じ東日本にある大都市を比較対象として、同様の調査を行うこととした。

方法：市販のそう菜、持ち帰り食品、冷凍食品、インスタント食品、レトルト食品の5食品について、代表的な品目を数種ずつ示し、品目毎の使用頻度を尋ね、＜使用しない→0点、月1～2回使用→1点、週1～2回使用→4点、週3～4回使用→8点＞として点数化した。イメージは、食品毎に、便利度・味・値段・品質衛生・汎用性・好感度の6項目について、－3点から＋3点までの7段階で採点してもらった。調査は郵送法で行い、時期は平成5年7月、対象は大学生の子をもつ母親とし、回答者数は新潟144、東京169であった。

結果：Ⅰ.両地域の得点を平均値の差で検定したところ、次のような有意差が認められた。(1)使用頻度；①新潟が高得点…そう菜の天ぷら・フライ類・コロッケ類・餃子類、冷凍食品のコロッケ類。②東京が高得点…そう菜の漬物類・煮豆類・佃煮類、持ち帰り食品の寿司類・弁当類・ハンバーガー・フライドチキン。(2)プラスイメージ；①新潟が高得点…そう菜の値段。②東京が高得点…持ち帰り食品の値段・汎用性、冷凍食品の汎用性、レトルト食品の品質衛生・汎用性・好感度。Ⅱ.新潟は東京に比べ、就業主婦家庭および3世代同居家庭の割合が有意に多かった。両地域において、専業主婦と就業主婦の間、2世代家庭と3世代家庭の間で、使用頻度やイメージの一部に有意差が認められた。